

銀

賞

『雨夜の星』

雨夜の星

高知県 県立山田高等学校一年 谷

まゆみ

お天道様^{てんとうさま}がゆつくりと、それはもう気の遠くなるようにゆるりと山々のすきまからお顔をのぞかせた頃です。朝一番の柔らかい風^{かぜ}が彼岸花^{ひがはな}のそばを駆け抜ける、そんな場所に燕^{つばめ}が一羽とまっていました。

それは思わず息^{いき}を呑むほど、美しい燕でした。朝日が翼^{つばさ}に溶け込んで雫^{しずく}のようにきらきらと輝き、すらりとした体からは堂々たる威厳^{いげん}があふれていました。燕はやや盛り^{さか}りを過ぎたとはいえ、気高き戦士^{けだか}でした。小賢^{こざか}しい烏どもを振り切^きって仲間を守り抜いたことも一度や二度ではありません。唯一^{ゆい}欠点があるとすれば、右の尾羽^{おばね}でした。そこは何かに引き千切^{ちぎ}られたかのように失われていました。周りの燕たちはその傷に胸を痛め、親しみを込めて『欠け羽さま』と呼んでいました。

欠け羽は近くの山からその下にある人里までをねぐらにしていましたから、通りかかる燕たちからたくさんのお話を聞いていました。ある時は子が親からはぐれたことを聞き、ある時は強く吹いた風で木々が倒れてしまったことを聞きました。そのたびに欠け羽はそこへ駆けつけましたから、ますます燕たちは欠け羽を頼るようになったのです。そして今日もたくさん燕たちが欠け羽のところを訪れました。

「欠け羽さま、人里では近^きごろ雨が降らなくて、草花^{くさな}だけでなく水まで枯れはじめています」
大変よねえ、と心配そうに、西^{しやう}の商家^{しやうか}に巣をもつ奥さんが言いました。

「人間の育てているものも枯れてしまっていたわよ」

「水源の方の水はなくなっているのかしら」

「もうずいぶんと少なくなっているそうよ」

その話を聞きつけて、そばを通りかかった燕たちも口々に語りました。

欠け羽はそのことを心配に思いました。けれど、雨のことはどうしようもありません。燕たちもそれが分かっているのか、不安を語り終えると次々と食事に向かつていきました。

——そういえば、近ごろは雨が降っていなかった。

思い返して初めて、欠け羽はそのことに気づきました。晴れている方が好きな欠け羽でしたから、しばらく雨が降っていなかったことに、今まで気がつかなかったのです。

欠け羽はふと空を見上げました。薄い雲が風にたなびいて、まぶしいほどに青く光り輝いているこの空は、欠け羽の心をふつと軽くしました。そうして、しばらく眺^{なが}めていると、ふと生まれた場所に帰ってみようという思いがうかんできました。欠け羽の生まれた場所はここからさほど遠いわけではありません。欠け羽はつと前方の山を見ずえると、大きく羽ばたきました。胸は期待にふくらみ、耳奥でどうつどうと血の流れる音がします。山を越え、谷を越え、もう一山越え。どこまでも広がる盆地に暮らす人々の、屋根も頭も越えたその先の森の中。そこに、欠け羽の故郷がありました。そこまで来て、欠け羽は急に逃げ出したいような気持ちになりました。突然、昔のことが思い出されて、石でも飲み込んだかのように胸が苦しくなりました。欠け羽はふらふらと旋^{せん}回^{かい}し、来た道に戻るよりほかありませんでした。

夜、ねぐらへ戻ってきた欠け羽は物思いにふけていました。故郷の景色は燕に家族のことを鮮明に思い出さ

せたのです。

欠け羽は長く長く息を吐いて、夢が自分を包み込むまで、じっとしていました。

「りん姉さま、まだ声を上げてはいけないの」

私は微かな声を出して、右横にいる姉に問いかけました。

「ええ、むらさき。母さまか、父さまが帰ってくるまではね」

姉は私よりも、もっと声を落として言いました。私は首を傾げて考えました。

——私、ずっと前から父さまを見ていない。次は父さまが帰ってきてくださればいいのに。

けれど、次もまたその次も、ご馳走をくれたのは母さまでした。

「りん姉さま。父さまは、どこにいらっしゃるの」

「私にもわからないわ」

そんな話をしていた時でした。夕日に紛れて、黒く大きな影が巢に舞い込んできたのです。兄たちはその影を母だと思ったのでしょうか。一斉に声を上げて、影を巢に招き入れました。けれど、姉は私を巢の隅に押さえつけて一言も発しようとしませんでした。

兄の悲鳴が姉の翼越しに聞こえました。私は目を大きく見開いて、周りがどうなっているのかを見ようとしました。翼の裏に包まれていては、どうやっても見ることは叶いません。姉は、尚も私が身動きできないように覆いかぶさっていました。それから、時折、兄の悲鳴や何かが落ちる音が響きました。随分経つと、影のたてる足音が私達の方へ近づいてきました。姉は体を強張らせ、胸がどくどくと大きく振動していました。影は

姉の翼を鋭く切り裂きました。姉の声にならない音が振動として伝わりました。影は右の翼を狙ったようで、私の左の胸あたりにじんわりと暖かいものが染み込んできます。姉が私を渡すまいと、一層強く包み込んだときです。影がぎゃあつと言いながら、巣から飛び去っていききました。私が姉の翼から顔を出すと、そこには人の子がいました。顔がひよこつと見え隠れしていて、手には布のようなものを握っていました。私はまだ恐怖で固まっているくちばしを開こうとしましたが、影を追いついた人の子はすぐに姿を消してしまいました。

それから、数日が過ぎました。

「りん姉さま、翼が痛むのですか」

「ええ。けれどすぐに良くなるわ」

姉は飛ぶまでにたくさん時間が必要でした。それは、影につけられた傷が原因であることは確かでした。けれども、ついに姉は飛ぶことに成功したのです。一緒に空を自由に舞い、遊びに本気を出す日々はとても楽しいものでした。その遊びが競争に変わるのには自然なことでした。毎日のように様々な競争をしました。森をくぐり抜け、小川を渡り、食べ物をとりながら、おいかけっこをたくさんしました。幾度も競争は行われましたが、いつも姉より先に勝利をつかんだのは私でした。だからといって、私達の関係が悪くなることはありませんでした。姉は私と遊べることのほうが勝敗よりも大事だと本気で思っている様子でしたし、私も勝ったことを鼻にかけるほど自惚れてはいませんでした。

その日、姉と私は日当たりの良い野原で日向ぼっこをしていました。傍には、青紫色の花をつけた竜胆が咲いていました。

「むらさき、燕が死ぬまでにやらなければならないことを知っていますっ」

姉は空を見つめながら、独り言のように呟つぶやきました。

「……燕はね、私たちと神様を繋つながなければならぬのよ」

「私たち……」

「そう、みんなよ。動物も人間も草花も、みんな。どちらかが困っていれば、私たちが橋となって神様と動物たちをつなぐのだと思うわ」

私はちよつと首を傾げて言いました。

「でも、私は神様なんて見たことありません」

姉は可笑おかしそうに私を見ました。

「きつと、見える日が来るはずよ。私にも、むらさきにも」

ふわりと微笑んだ姉は、その場で羽を動かすと、いたずらっぽい光を目に宿しました。

「今日は宝探しをしましょう」

姉は歌うように私を誘いました。私は嬉しくなつて、自分の羽を姉さまに擦こすりつけました。姉は夕暮れに集あひつくと、里の方へ飛んでいきました。私も慌てて、追いかけるように飛び立ち、里へと急ぎました。夕暮れ、私達の足元に転がった宝は三十三個でした。私が十六個、姉が十七個でした。私にとつて初めての敗北でした。姉の瞳には嬉うれしさとしりぞけないような気持ちが滲しみんでいました。胸にじわりと広がった、なんとも言えぬ気持ちを押し込め、私は姉に勝利の座を譲りました。

夜になり、虫の声が聞こえる頃には、姉の寝息が聞こえてきました。けれど、私はどうしてか眠りにつくことができませんでした。胸の奥に泥がぬめりと溜ためまっているようでした。

—置いていかれる

刹那、胸を突いて出たのはそんな感情でした。

—優しいのも賢いのも全部、姉さまの方。飛ぶことで負けてしまえば、こんな私には何が残るの
溢れ出る感情を止めることはできませんでした。堰を切ったように流れ出る暗い感情は留まることを知らな
かったからです。そうして幾ばくか過ぎた時、私は自覚しました。

—私、姉さまが劣っていることに安心していたの

ひどく醜い考えでした。姉に傷さえなければ、こんな思い上がった考えをすることもなかったのだという言い
訳が浮かびました。

—醜い、醜い。嫌い、全部消えてなくなればいいのに

衝動的に右の尾羽を引きちぎりました。それしか、自分を痛めつける方法が知らなかったからです。

—こんな自分なんて壊れてしまえばいいのに

私は、隣にあつた暖かなぬくもりを振り切るようにして、早朝の闇をがむしやらに飛びました。姉にこんな自
分を見せたくなって、私はそのまま逃げるように遠くの、遠くの地へと、飛び去ったのでした。

欠け羽は薄暗い時間に目を覚ましました。夢を見ている間にあふれた涙は胸をぬらし、体の力は抜けきって、
隣の幹に倒れ込んでいました。その時、ぼつりと頭の上を濡らすものがありました。雨です。小さな雲が空から
落ちてきて、地面に染み込んでいきました。欠け羽が泣き止むまでのひとときの雨でした。けれども、雨は欠け
羽の心に積もったままだった泥を少しずつ洗い流してくれるようでした。

日が昇り、地面は陽の光を受けてすっかり乾いていました。欠け羽は、やはり生まれた場所に帰ろうと思いましたが、その気持ち崩れてしまわないうちに戻らなければ、もう二度と勇気をふりしげれない気がしたからです。自分を鼓舞するように翼をひと振りすると、空へと羽ばたきました。山を越え、谷を越え、もう一山越えしました。そんな時、ふいに視界の端に一人の人間が映りました。目を凝らすと、その少年は木の根本にうずくまっていた。欠け羽は何やら引き寄せられるようにして、木の枝におりたちました。少年は枝のゆれる音に肩をふるわせ、こちらを仰ぎ見ました。そうして、目を見開くと、にこりと笑って言いました。

「おかえりなさい、燕さん」

それは、幼い欠け羽と姉を救ってくれた人の子でした。欠け羽は思わぬ再会にくちばしを閉じたり開いたりしながら木の枝にしがみついています。

「これも何かのご縁でしょうから、どうぞ上がっていきませんか」

少年は木立に隠れる小屋を指さすと、立ち上がって歩いていきました。欠け羽は少年の向かう先が自分の生まれた場所であることに気がつきましたが、昨日飛んできたときほどには苦しくありませんでした。欠け羽は目の前を歩く少年が闇を照らしながら歩いてくれるように感じました。

「去年まで貴方のお姉さまの鈴さんがいらしていたのですが」

少年は悲しそうな顔をして、縁側に腰掛けました。

「夏の末に、もうここへは来られないから、と」

欠け羽は、息もできないほどに驚き、慌てて少年に問いかけました。

「姉さまは今どこにいらっしゃるのですか」

「僕も知らないのです。突然いなくなっていましたから」

少年はうつむいて黙っていました。突然思いついたかのように、ぱつと欠け羽の方を見ると、小屋の中に走り去っていきました。そして、少しするとはたと小気味良い足音をさせながら、欠け羽に何かを差し出しました。

「燕さん、これをどうぞ」

少年は一片の羽を置きました。それは間違いない姉の羽でした。欠け羽は、青藍色に輝く羽を自分と姉の他に見たことはありませんでした。

「大事にしていたものですが、燕さんが来てくださったので、お返しすることができます。僕ではもう、持っていることもできませんから」

少年がどうしてそんなに悲しげに微笑んでいるのかわからず、不思議そうに首をかしげる欠け羽を見て、少年は少し可笑しそうに笑いました。

「僕は明日の朝、水神さまに捧げられるのです。……最近、雨が降っていないかったでしょう。里の方では作物が枯れはじめているそうで、贄をだすことにしたいのです」

欠け羽は少年にかける言葉を見つけることができませんでした。少年はふわりと微笑むと言いました。

「明日の夜明けに里の人たちが迎えに来てくれるそうです。でも、今日の夜、僕とお話してくれる友達がいなのです。ですから、燕さん。今日、泊まっていきませんか」

少年はだんだんと照れくさそうに、頬を赤らめました。欠け羽はそんな少年を力いっぱい抱きしめたいような気持ちになりましたが、その代わりに大きくうなずいて、私で良ければ、と笑いました。

欠け羽と少年はお月さまが空高くのぼるまで話しつづけました。ともに歌い、悲しみ、笑いました。楽しい夜でした。欠け羽はいつの間にか眠っていました。

とんつ、とんつ、と、何かを叩く音がしました。欠け羽ははっと目を覚ましてあたりを見回しました。隣に寝ていたはずの少年の姿はなく、戸口が閉まる音が、からからと響きました。少年は水源に向かったのでしょうか。欠け羽は胸に冷たい風が吹き込んだかのように感じました。この家に来る前にはなかった寂しさが、欠け羽の体を満たしていました。欠け羽はどうしようもなくなつて、ぱたぱたと小さく羽ばたき、小屋のあちこちを飛び回りました。すると、隅に紙の束がぼつんと置かれていることに気がつきました。欠け羽は少年の跡をたどるようにその紙を開きました。

里の人が僕のところに来て、十日後に水神様に捧げる儀式を言うてきた。僕にはお父さまもお母さまもないから。生け贄だから、捧げられないといけない。

あと五日。本当は逃げ出したい。本当はもっと遠くのところに行つて、色んな景色を見てみたい。あと三日。鈴さんに会えたら良いのに。そうすれば、一人で寂しくなることなんてなかったのに。

今日、僕が捧げられる日。鈴さんの妹、燕さんに出会った。とっても楽しかった。こんな日々が続けばいいのに。そうすれば、燕さんずっと話していられるのに。生きていたい。

紙は濡れていたのか、ちぢれて文字が歪んでいました。欠け羽は少年の笑顔を思い出しました。そして、姉の言葉が欠け羽の頭を駆け抜けました。

——困っていれば、私たちが橋となつて神様や動物たちをつなぐのよね、姉さま。

欠け羽は姉の羽を自分の欠けた尾羽に差し込むと、あらん限りの力を振り絞つて、大きく羽ばたきました。
——どうか、間に合いますように。

欠け羽は翼がもげてしまいそうなほど必死に水源に向かつて飛びました。飛んでいる時間がひどくゆっくりに、翼は鉛のように重く感じました。欠け羽は森が途切れ、大きな池が空に向かつて大きく口を開けている場所へ吸い込まれていきました。そこには今まさに池へと身を投げようとする少年の姿がありました。欠け羽は翼を大きく広げると少年に体あたりしました。どうしても、少年を押し留めたいと思いました。

「生きたい、と願つたのでしょうー！」

欠け羽は叫びました。安堵^{あんど}と悲しみがぐちゃぐちゃになつて、胸をぐるぐると駆けめぐり、欠け羽の目には涙があふれました。

欠け羽は少年の胸にしがみついて言いました。

「……生きていたいのでしょう？」

少年は驚いたような、泣きそうな顔で欠け羽を見つめました。

「生きて、いたいです」

少年は言葉をとぎれさせながらも、はつきりと言い切りました。欠け羽は少年をしっかりと見つめ、静かに少年に言いました。

「姉さまだつたら言つと思つのです。困っている方がいれば、助けなければ、と」

欠け羽は、ばさりと羽ばたくと上空にまっすぐ舞い上がりました。そしてくると体を反転させると、暗く硬

い水面へ真つ逆さまに落下していききました。風が耳元でびゅうびゅうと鳴っています。そして次の瞬間に、音も景色もなにもかもが、一瞬で消えました。欠け羽は、どこまでも果てしなく澄む青の沈黙の中をたゆたいながら、一つの願いをとねえます。

——どうか、神さま。お救いください。雨を降らして、私の代わりにあの子を包み込んでください
欠け羽の目には、白藍色の鱗を輝かせる龍の姿がうつりました。

欠け羽は長い夢を見ました。青の中を駆け渡ってきた姉が、私の目の前に降り立ちます。優しく見つめる姉の、懐かしい葡萄色の瞳。欠け羽はむらさきに戻って問いかけました。

——りん姉さま、私はちゃんと成長できましたか？

——ええ、もちろん。貴女は私の自慢の妹よ

むらさきは泣きそうになるのを必死でこらえて、思いつき笑いしました。そして、悲しく辛く楽しかった毎日を語りはじめました。思い出は青の世界に溶け出して、どこまでも一緒に駆けていく姉妹の道を照らしました。